

令和六年度 入学試験

令和六年二月一日

適性検査Ⅰ

注意事項

- 1 問題は1のみで、1～5ページに印刷してあります。
- 2 試験時間は四十五分間です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入し、解答用紙だけを提出してください。
- 5 答えを直すときは、消しゴムできれいに消してから、新しい答えを書いてください。
- 6 小学校名・受験番号・氏名（ふりがな）を解答用紙の決められた欄に記入してください。

問題は次のページからです。

1

次の**文章1**と**文章2**を読み、あとの問題に答えなさい。

(*印のついている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

文章1

社会部の記者だった2000年ごろ、少子化が問題としてクローズアップされるようになった。その原因として「働く女性が増えたから」という報道に接するたび、「違う、こんな働き方をしていたら出産どころか結婚もできない」と違和感を覚えた。当事者の一人として、女性の声を取材し発信する必要性を感じ、少子化や女性の働き方などについての取材をするようになった。

しかし、当時のデスクに「少子化の原因は男性中心の長時間労働を前提とした働き方にある。ワークライフ・バランスが大事だ」と、取材や企画の提案をしても「働きたくない人の話を取りあげてどうするのか」と却下され、なかなか提案が通らず「デスクの壁」を感じた。

同じ時期、事件の張り番で毎日警察署に詰めていたとき、他社の女性記者と話をする機会があり、少子化問題や保育園に預けたくても預けられない待機児童問題などについて「提案しても通らない」と聞き、同じように「デスクの壁」に直面していることを知った。また、記事、企画として採用されないと、取材相手に時間を取ってもらっても申し訳ない、と大切なテーマなのに取材を躊躇してしまふ、という声もあった。こうしたことがきっかけとなり、2001年、有志の女性記者やディレク

ターが集まり、少子化や働き方改革など関心あるテーマについて、取材したい人を講師に招き、「いい人、いい情報を共有し、いい発信につなげよう」と、会社の壁を越えて学ぶ女性ジャーナリストの自主的な勉強会を始めることにもなった。

圧倒的に男性が多い組織の中で、提案が通らない「デスクの壁」だけでなく、子育てしながら働き続けることなど様々な「壁」に直面しながらも、問題意識を共有できる女性たちとつながることで、ともに「おかしい」と思うことに声をあげ、ワークライフバランスなどの働き方改革、待機児童問題、そしてMeTooムーブメントなどジェンダーに関する発信を続けてきた。

また、メディアに女性が数として増えるだけでなく、管理職となる必要性も味わってきた。

2005年から始まった「日本の、これから」という視聴者参加型の討論番組で「少子高齢化」や「男女共同参画社会」などの放送に記者として携わった。当初、制作チームに女性が少なく、女性が結婚しない理由や出産を選ばない理由について、結婚か仕事かの選択ではないことや、一生結婚したくないという訳ではないなど、会議の場で何度説明してもわかってもらえなかったが、参加する女性が増えると「女性の意見」として受け入れられるようになった。

しかし、VTRの試写の段階で、男性デスクから「こんなはずはない」「わかりにくい」と言われ説明を尽くしたが、最後はデスクの意見を反

映した「わかりやすい」^⑥ステレオタイプの描き方、コメントになったことがあった。抱いていた違和感について、放送後、視聴者からも「実はこんなに単純ではないはず」というFAXが届いていた。

コメントや描き方について、現場の記者やディレクターがいくら違和感を伝えても、デスクに聞き入れられなければ、そのまま放送に出してしまうため、「デスク」という意思決定をする立場に、女性がいること、多様性があることが重要だと感じる。

また、性別を問わず、家事や子育て、介護などの経験をしている人がデスクになると、表現のステレオタイプ化を防ぐと実感したこともある。マンションから子どもが落下したという痛ましい事故があったとき、原稿を直していた子育て世代の男性デスクが「親が目を離れたすきに」という表現について「親だつて、ずっと子どもから目を離さないのは不可能だよ。責任を感じている親をさらに追い詰めるだけだ」と、これまでに当たり前に使われてきた表現を削除していた。働き方改革が進み、多様な人がデスク、管理職になることは、多様な視聴者に寄り添う報道につながると思う。

女性活躍に関する議論の中で、なぜ、役員、管理職に女性が増えることが重要なのか、と聞かれることがある。それは、番組やニュースなどの放送コンテンツを決める、意思決定できる立場だからだ。

（治部れんげ、田中東子、浜田敬子ほか『いいね！ボタンを押す前に』山本恵子「女性が報道現場で意思決定を持つ意味」による）

【注】

- ① デスク——記事の取材や編集などをまとめる、社内の人。
- ② ワークライフ・バランス——仕事と生活が調和していること。
- ③ 躊躇——迷って決心できないこと。
- ④ ジャーナリスト——新聞、テレビなどの記者や編集者。
- ⑤ ジェンダー——社会的・文化的につくられた性別の差。
- ⑥ ステレオタイプ——行動や考え方が固定的なこと。

文章2

社会的な性別格差を示すジェンダーギャップ指数で日本は146カ国中116位(2022年)とあいかわらず「世界最底辺」をうろうろしているが、性別による格差がもつとも小さい^①北欧諸国でも、男女の平均賃金にはかなりの開きがある。その理由のひとつは、看護・介護などの職に就く女性の割合が高く、彼女たちの多くは公務員なので、民間企業で働く男性より賃金が低くなるからだ。

とはいえ、これは「差別」なのだろうか、それとも自ら望んでそのような仕事を選んでいるのだろうか。

「差別」だとすると、彼女たちはなにもか(社会の圧力などに強制されて、いやいや看護・介護という「汚れ仕事」をやらされていること)になる。誇りをもって働いている女性たちは当然、こうした「偏見」に反発

するだろう。

これとは逆に、自由意志で賃金の低い仕事を選んだとすれば、男女の賃金格差にはなんの問題もなく、政府が介入する理由もなくなる。リベラルはこの論理を受け入れることを躊躇するだろう。

「看護・介護の報酬を上げる」というシンプルな解決策があるが、そうなる税金を大幅に引き上げるか、患者・利用者かんじやの個人負担で賄まかなうしかない。これはどうして有権者の支持を得られず、北欧の政治家ですら尻込みしりごみするだろう。

こんな不毛な対立が続くのは、ジェンダーギャップの背後に男女の生物学的な性差があることを隠蔽いんぺいしているからだ。

生まれたばかりの赤ちゃんでも、男の子はモビール紙やプラスチックでつくられた動くおもちゃ)のようなモノに興味を示し、女の子は母親や看護師などヒトを見つめる。進化論的には、これは男の脳が(動く動物を仕留める)狩獵しゆりやうに最適化し、女の脳が(共同体の女たちと子どもの世話をしながら行なう)採集に最適化しているからだ。

こうした主張は一部で「性差別的」とされ、重箱の隅をつつくような批判がなされているが、男と女では網膜もうまくの作りからちがっている。

網膜にはM細胞さいぼう(大細胞)とP細胞(小細胞)があり、M細胞はモノの動きに、P細胞は色や質感の状態に反応する。男女の網膜を調べると、男の方が厚い。これは網膜が大きくて厚いM細胞が広く分布しているからで、それに対して女の網膜は小さくて薄いP細胞に占められている。

幼い子どもにクレヨンで好きな絵を描かせると、女の子は赤、オレン

ジ、緑、ベージュといった「温かい色」で人物(あるいはベット、花や木)を描こうとし、男の子は黒や灰色といった「冷たい色」を使って、ロケットや車など、なんらかの動きを表現しようとする。

これは親や教師が「男の子らしい」あるいは「女の子らしい」絵を描くように「ジェンダー圧力」を加えたからではなく、網膜と視神経の生物学的なちがいから好みに性差が生じるのだ。

男と女では「見える世界」がちがっていて、そのため脳の構造も(わずかに)異なっている。これによって、男は空間的知能が発達し、女は言語的知能が発達した。

これは説得力のある理論だと思うが、「女は数学が苦手」というステレオタイプを嫌うひとたちは許せないらしい。しかし不思議なことに、「男は言語的知能が低い」というステレオタイプに、同じように感情的に反発することはない。

男と女で得手不得手があってもいいではないかと思うかもしれないが、これが「偏見」とされるのは、現代社会において、論理・数学的知能が(極端に)高い者がとてもない富を獲得し、その性比が大きく偏っているからだ。一時期は個人資産30兆円(トヨタの時価総額と同じ)になったイーロン・マスクをはじめとしてシリコンバレーの起業家は男ばかりだし、年収10億円や100億円のヘッジファンドマネージャーもほぼ全員が男だ。

アメリカ西海岸を拠点とするテクノロジー企業は、世界でもっともリベラルな方針を掲げ、男女平等を推進している。それにもかかわらず、

公平な(はずの)採用試験で選ばれるのが男ばかり(子どもの頃にアスペルガ
ー症候群と診断された者も多い)なら、そこには明らかに男女の生物学的
な性差があるのではないか——と社内レポートに書いたグーグルの従業
員は、たちまち解雇されてしまった。

男女の脳にはなんのちがいもないとほんとうに信じているのなら、「言
論弾圧」をするのではなく、エンジニアやプログラマーの男女比を同じ
にすればいいだろう。なぜそうできないかというと、きわめて高知能の
領域では男の方が優秀で、男女平等だとライバル企業に優秀な人材を奪
われると思っているからではないのか。

(橘玲『バカと無知』による)

【注】

- ① 北欧諸国——アイスランド、ノルウェー、フィンランドなど。
- ② リベラル——個人の自由と権利、多様性を重視する立場。
- ③ シンプル——単純。
- ④ 尻込み——ためらうこと。
- ⑤ 不毛——何の進歩も成果もないこと。
- ⑥ 隠蔽——真相を隠すこと。
- ⑦ 網膜——眼球をおおう内側の膜。
- ⑧ 得手不得手——得意不得意。
- ⑨ 性比——男女の比率。
- ⑩ 解雇——使用者が労働者を一方的にやめさせること。

【問題1】

文章1に「『デスク』という意思決定をする立場に、
女性がいること、多様性があることが重要だと感じる」と
ありますが、なぜ重要だと筆者は感じているのでしょうか。
解答欄にあってはまるように、本文中から十三字でぬきだし
なさい。ただし、句読点・カギカッコなどの記号を含む場
合は一字と数えます。

が可能になるから。

【問題2】

文章2に「これ」とありますが、どのようなこととし
ようか。「こと」につながるように本文中のことばを用い
て説明しなさい。

【問題3】

ジェンダーギャップを解消するために、日本政府は20
30年までに、大企業の役員(取締役など、労働者を使
用する役職)の女性比率を30%以上にすることを目標と
しています。このことについて、文章1、文章2の
内容をふまえ、あなたの意見を理由とともに四百字以上四
百十字以内で書きなさい。ただし、次ページの「きまり」
にしたがうこと。

「きまり」

- 題名は書きません。
 - 最初の行から書き始めます。
 - 各段落の最初の字は一字下げて書きます。だんちやく
 - 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。
 - 「や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じように書きます。(ますめの下に書いてもかまいません。)
 - 「。」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、「。」で一字と数えます。
 - 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。
 - 最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。
-